

う、あれは全く遊びだらうな、生活の必要動作ではないだらう。

山の中で栗鼠の動作を見てゐると、木より木へ飛び移る時に、しばし中途でモンドリを打つ、最初は、情力を調節するためだと考へた、ところが調節の必要な距離においても、同じくこのモンドリを打つ、さればこの栗鼠も遊びをなすと思つていゝだらう、スポーツは人間のみの所有ではないだらう、職業的スポーツマン、学校の選手などは、自ら甚だ好まざる時にも、スポーツを行ふけれども、さうでない場合の人間のスポーツ、筋肉運動の楽しみは、あれは食欲、性慾と同じき本能だ、鳥獸にこれあることも當り前だ。

秋のころ、山中の鳥屋場で數日暮したことがある、渡り鳥を網へ誘ひ込むた

めの罟のつぐみが、もし籠を逃げると厄介なことだといふ話だ、この罟は決して他處へ行かず、近くの木の上で鳴いてゐる、それで網へかゝるはずの渡り鳥も外れてしまふ、そのため、生捕れぬ場合は殺すより方法がない由、渡りの習性を忘れて團體に屬さず、どこへも行けずに今までの職業と反對の行動をやつて、命を失ふ、人間社會にもありさうな話だ。

同じ鳥屋場での話に、罟の籠の上に、もし鷹が来て留まつた場合は、この罟數日間は囁らぬ由、鷹の威勢もすばらしい、このごろ仕事の参考のために、數羽の鳥を飼つてゐる、朝はもろくの囁り、なかの賑やかなこと、すると或朝この鳥ども一向に鳴かず、不思議に思ひ、考へて見ると、前夜雀を一羽手に入れた、この雀の籠が、他の鳥どもから見えるところにあつたので、恐れて鳴きを留めたわけであつた。

## 岩國博多柳川

## 岩 國

岩國の錦帯橋の、鎗倒しの松の話はおもしろい、諸國諸大名江戸參觀の節、他藩の城下を通れば、相應會釋の形式あつたわけだが、岩國の吉川氏は毛利の支藩だから、それで鎗を立て、大手を振つて通つた、吉川の人々無念に思ひ、枝の低き松を、此の橋の袂に植ゑた、どうしても行列の鎗を倒さねば通れぬ仕掛けであつたと云ふ、吉川家は武勇名譽、朝鮮碧蹄館で、一族小早川隆景と共に、明の大軍を打ち破る、長谷川好道將軍が、此の古戰場碧蹄館の一水亭を移して

来て、吉川氏館址に近い紅葉谷公園の池に臨んで建て、ある、此の庭の泉石なか／＼上出来、朝鮮建築の水亭が、しつくりと出合つて、よき眺めとなつて居る。

錦帯橋はまぎれもなき日本の名橋だ、此の幾段の反り橋を、朝夕の用事に渡りあるく人々は幸福だと思ふ、だが又別に、むしろコンクリートの眞平らなのを、早く渡つて行きたい、反り橋など上り下りの面倒は、此のスピードの世に、何の幸福ぞ、と云ふ論もあるべきだと思つた、スピードアップは今の文化だが、今の文化は精神的には不具な文化だ、此の美しい橋の上で、山を見鳥を聞くを楽しむところの、心の餘裕ある文化に生活したいものだ。

國木田獨歩は、茲で其の少年時を過ごした、釣に耽つて歸りの遅い少年を、老祖母の心配する場面の短篇があつた、と覺えて居るが、或は此町の水邊の思

ひ出であつたかも知れない、短軀にして瀟洒、正直にして豪邁なりし彼の、小學校の出来はどんなものであつたらう、岩國の永田町長さんの話では、同じ年で同じ級で、彼は常住二番、町長さんはいつも三番であつた由、獨歩社時代、屢々品川の海や利根の釣遊びに誘はれた、氣短かな彼れにして、よく釣など出来る事、と思つたが、是も或は此の錦帯橋下、少年時の遊びの癖の存したものであつたらう。

## 博 多

お寺の庭に雨がふる、藁が苔の上に居て、長い事動かず、お寺は福岡の寶聚庵、和尚は士謙さん、士謙和尚の立て、呉れた抹茶が咽喉を通ると、夜前長酒の宿酔の心さわやかになり、静かなお寺のさみだれだ、前年此處で、龍門和尚の書を、此の士謙さんに貰つて行つた、表装を新たににして、床の間に掛け置く、

友達の手道の天狗連は素直な品高き字だと賞めるもの多く、も一つ欲しいと頼んであつたが、なか／＼見付からぬと云ふ話だ。

岡山で寂殿の書、此程大人氣で値貴く、もはや吾輩の財布に及ばぬ、此地では仙厓の書畫、是も九州の諸富家爭奪の勢ひだ、福山出身の故溪仙畫人は、いち早く此の仙厓に目を留めて、畫風も書風も若干の參酌を認めるが、そこは彼の實力才能を以て、よろしく酸化し燃焼し、風韻の助けとなつて居る。

寶聚庵を辭し去つて、幻住庵に行く、此寺仙厓の故住で、再建について溪仙子の力あつた由、寺藏の仙厓筆六曲屏風、寒山拾得豐干の圖は、蓋し仙厓遺作中の白眉であらうと思ふ、其屏風を再び見るわけではなく、寺後の墓地に行つて、友人觀魚莊夫人の墓に參る、九州遊をなす毎に、觀魚莊の客となれば、あるじは居ずとも、妹の家のやうに落付いた、やさしく美しかりし人、亡くなつ

て三年、墓が出来て始めてだが、花を供して帽子を取れば、禿頭に雨つめたく心の中もひえくんとする。

博多に來れば誰も行く「水だき」の坐敷の欄干に立つ、川づらにうす日さし、沖の方も明るくなつて來た、今日は柳川で庭球をする約束、此分では十分に遊べるだらう、と見ると向ふ岸の石材置場に、一人の若き女が現れた、小石を拾つては、引き汐の川床に投げて居る、いつまでも投げて居る、そのうちに右の片肌を脱いだ、うす日はありながら、又ちらちらと降る雨の中で、まだ石を投げて居る、お芝居のお夏狂亂は、笹をかついで振り事だが、此の目前のお夏は、プレートに立つたピッチャーの投球動作を、なか／＼巧に真似て投げて居る。

柳川

柳川の立花伯の農園で、鳥からぢきに取つて喰べた、あの苺の味はよろしか

つた、今歳は苺が不作で、其爲今迄残つて居た、と主人伯の話、農園は立花家三代相傳の經營だ、主人伯は、興津の農場で實地を仕込んで來て、此處でもろもろのなり物の改革に、自ら汗を流して居る、敢て貴族院の改革非改革にたづさはらない、桃も梨も既に囊を被り、葡萄は孔雀石の緑の房を垂れて居る。

舟小屋の礦泉宿は、矢部川岸にある、矢部川は久留米領柳川領の境で、其爲であらうか柳川の地かた川沿ひに、大楠の並木が續いて居る、川を隔て、夕靄の間に眺める、此の楠の若葉の美しさ、日が暮れると螢だ、此處の螢は世のつねに増して大きなもの、九州は南國、殊に此の筑後平野一帯の水郷は、日の蒸すところ、水の濕ほす處、草も木も恣まゝに生ひ茂つて居る、朝、小雨の中を久留米に出た、其道すがら櫛の木の集團を到る所に見受けた、九州に此木は多いのだが、此邊に恐らく一番集つて居るのでは無いかと思ふ、櫛の紅葉はすさ

まじい、山の間一本あつても、火が燃えて居るやうだ、まして此の大集團が、一ぺんに赤くならうならば、さぞかし見ものであらう、忘れずに居て、秋十一月に來て見ねばならぬ、ついでに彼の昨日の農場の、葡萄の孔雀石が、黒耀石の如くに熟れたるを賞玩いたすのも、勿論豫定の中に置かう。

(十二年)

### 浮島動く

南洲翁のお孫さんが、雌阿寒岳で遭難して蟻の卵を食つて辛抱し、七日目に救はれた話が、ついこの間あつた。山といふものは、天氣晴朗にして案内人が達者ならば至極のんきな物だが、俄然變調を呈して狂風寒雨となり、一ぺん途に迷ひでもしようなら、身外の難澁と、心中の恐怖とで、飛んだ危険に落ちてしまふ。雌阿寒岳を、雄阿寒岳の中途あたりから望んだ時、あの大きな頂上に横はる火口、噴烟など、異常な景觀で、是非行つて見たいと思つたが、時間の都合で止めにした。その時學校の子供が登つて、熊に出會つたと話してゐたが、

西郷さんも熊の糞を見て心細かつたと書いてあつた。先年日光の鬼怒沼山に行つた時、まだホヤ／＼の熊糞を見て、私も實は恐れをなした覚えがある。

上越境の谷川岳と、山形の藏王山は時々人を喰ふ山だ。此の藏王山の頂上の、火口湖のありさまを寫眞で見てから、登つて見たく思つてゐたが、先日志を果した。天氣晴朗で話の面白い案内人で、大勢の女子青年團の登山隊と前後して、高湯からの往復六時間足らず、まことに氣樂な山であつた。これを仙臺方面から登つて、山形の方へ下らうとする、山頂の廣いところで、雲煙濃厚な場合、時として途を失ふ事ありといふ、山スキーなどの節、山の一方お天氣で、一方吹雪といふやうな事になれば、それこそ命取りであらう。

藏王の頂上の火口湖は、お釜と名づけられてある。山形の人の話では、常に雲立ちが多いので、お釜を拜んだ人は運がよいといふ事になつてゐる由、こち

らも運がよかつたか、お釜の縁に出る、目の下遙に低い火坑の中に、凝然と湛へてある、まん丸な水を見た。見たと思つてゐるうちに雲が立つて、何も見えなくなり、しばらくして又見えた。二三分も隠見してゐて、やがて全く雲の底になつてしまつたから、少し遅れて來た人は所謂運が無かつたであらう。

近頃風景に新たに名をつける事流行だが、どうも急製の命名はビタリとはまらない。この火口湖をお釜といつたやうに、荒つぽい中に神祕めいた、打つてはまつた名は、昔から土地の人が自然に感得した形容だらう。お釜の水の色は日に七度變るといつてゐる。だん／＼四圍の火口壁が崩れて、淺くなりつゝあるさうだが、これが乾き切つて火口原になつてしまふか、乃至は再びお釜の湯が沸いて又も火を噴くか、火山の了見は奇しくも解り難い。昔、凶年の懼れある年には、仙臺の殿様からお使者が立つて、このお釜に物を投げ入れる神事あ

つた山。それではさぞ硫黄臭い雨が降つたであらうといふと、いや雨を止める方のお祈だといふ。東北六縣、昔から冷害に苦しんだものと見える。

藏王の頂に茂吉さんの歌碑がある。

みちのくを二わきさまに聳え給ふ藏王の山の雲の中に立つ

故人百穂老が岩手の岩手富士で

こゝにして岩鷲山のひむがしの岩手の國は傾きて見ゆ

いづれもウロ覚えだから、或は一二字誤りがあるか知れないが、佳い歌だ。

誰か發起して、あの山にもこの百穂歌碑を立てかしと思ふ。藏王の頂に尻を据ゑて見はらす、たゞ白雲の海の中から、朝日山、月山、鳥海山などが顔を出して居る、あの鳥海山にも行つて見たいが、是に登つた友達の話では、恐ろしく

道の長い山で、河原三里、林三里、草山三里、合せて九里が閉口であつたといふ、月山を見れば、山形の長谷川氏に見せて貰つた芭蕉の短冊を思ひ出す。

すゞしさやほの三日月の羽黒山

雲の峰いくつくづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

是が各一句一軸三幅對で、筆蹟時代仕立まことに三拍子揃つたものであつた。芭蕉翁の行脚の旅、囊中乏しくなれば、短冊一枚錢二百文で渡したといふ話、うそか、ほんとか知らず、二百文は今のお金で何程に當るものやら、ともかく奥の細道の長途は、半ばは雲水にあこがれつゝ、糧を道々のしるべに求める、今の遊歴書畫家の方法、半ばは彼の正風宣傳の爲、かねて所在同士の結合を目的としたであらうと考へる。

藏王の頂の熊野神社の前に、一對の石獅子があつた。山上の風雨に古びては見えるが、明治初年の月日が彫つてある。大抵石工物は、昔ほどおもしろく、今のはどうも小細工で佳くないが、此の石獅子は、大まかで然かも形正しき物であつた。高湯口の登山道の中頃に、齒の痛いやうな清水の小瀧の中に、袈衣婆の石像、これも明治の年號で、同じく山形市の石工の銘だが、見るに足る彫法と思つた。山形には良き石工の流れがあると見える。就て思ひ出すのは、山形の知人菊地氏所藏のもぐさの刀一口、もぐさは舞草と字では書く由。姿は正しき古刀の反りで、なかごも肌もよろしいが、それで居て何となく田舎臭いところがある。僻遠の地に在つて、然るべき技倆を持ちつゝ垢抜けせず、しかも時代の姿はどうしようも無く、自然と映つて來る。何の道にも有る可き話だ。岩手の平泉、北上川の東岸に、鍛冶屋敷と今も地名に残つて、前九年後三年の

合戦の頃から、刀工の住みついたものだといふ、刀尖二寸程のしのぎに近く、簇の痕あり、中程に一分ほどの切り込み、はゞき元から七八寸は、ひどい研ぎ瘦せ、大きな双こぼれの名残りだらう。ずる分切れさうですなといへば、巻き藁は豆腐の如く、キング講談俱樂部を五冊重ねて、一打ちに二つになつた、と大の自慢。よろしければ持つて歸れといはれたが、遠慮をした。今北支那に働く大尉殿中尉殿の腕利きに揮はせたい。

藏王山の頂近くは、風鈴躑躅の花盛りであつた、この花のこの如く多いのも珍しい、木立になると蟬が鳴く、蝸の鳴き立ちの節かじが、他處と異なつてゐる筈だと、案内人がいつてゐた、『しづけさや岩にしみ入る蟬の聲』、この蟬は芭蕉の奥の細道の、あの時節にすれば、まさしく蝸であるべきだ、と井泉水氏は説いてゐる、蟬の聲の立石寺は普通山寺と呼ばれる、山形市から車二十分ほど、數



年前の秋、私は奥の細道一巡の旅の時に、初めてこの寺を訪ねた、丁度山形市に博覽會があつて、そのためこの寺も見物多勢、『しづけさや』の趣きには遠かつた、風景は凡でない、それで又今度行つて見た、秋田の方の團體客、二十台のバスで取り詰めて、山はお婆さん中婆さん蟻の行列、にぎやかなこと、實は此處で一圖物にしようといふ志があるので、一日置いて又行つて見た、開山慈覺大師、千餘年不滅の法燈、根本中堂に瞬いてゐる由、本家比叡山の中堂の燈火、信長に焚かれた時に絶えたのを、この山から火種を持つて行つて繋いだと傳へてゐる、一方、安藝の宮島彌山の頂にも不滅の焚火、それから持つて行つた、とあちらでは説いてゐたやうに思ふ、縁が近い故こちらの方であらばあるべきだ。

この日は山に人少く、しんかんと照る夏の日盛り、まれに白衣の行者が見え

る、月山、羽黒、湯殿をかけた、三山參りの歸り路の人々だ、凝灰岩の一山直立何百尺、割れたり反つたり穴があいて見たり、見てゐるうちに人の顔獸の姿になるやうな、風化雨蝕の怪奇、これに根を託するから、赤松も眞直には延びられず、風情おもしろく、處々に危亭あり、亭ごとに佛をまつる、寺は四、五軒、昔は十二院あつた由。

岩に巖を重ねて山とし、松柏年古り、土石老いて苔滑に、岩上の院々扉を閉て、物の音聞えず、岸をめぐり岩を這て、佛閣を拜し、佳景寂莫として心すみ行くのみおぼゆ

本文かくの如くにして、閑さやの句になつてゐる、その寺の一軒に申入れて、山形から持參のパンで午飯にするとて、茶を所望した、茶の外に畠の胡瓜に味噌を添へてくれた、しばらく休んで、うまかつた胡瓜の料に、なにがし包んで

差出すと、飛んだ事をと、寺の女衆受取らず、佛さまへ上げてくださいと納めてもらつた、旅人をいたはつて、物喰はせ茶吞ます事に、償ひを認めざる心、東北農家の温かい習はしだ。

さて話は元の藏王山にかへる、山を下りて高湯へ来たのが十二時少し前、見がたしといふお釜も拜んだし、運の好い處であの、大沼の浮島へ飛ばせて行かば、島の動いてゐるのに出會ふかも知れない、どんな物だらうと連れの齋藤さんに相談する、株をやる人が、浮島の動くを見れば大中りをする、地方官が見とゞければ、その内榮轉と喜ぶ話だ、齋藤さんも實業家だから、何かの心づもりもあつたらう、行つて見ようとなつて、車を頼んだ、十何里の路、二時に出發、四時には著くであらうといふ。

浮島の不思議に心を動かしたのは、橋南谿の東遊記を見てからだと思えてゐる。

。初夏の頃、沼の上の鳥動く事あり、其數六十餘、日本六十餘州に象る、小なるもの、大なるもの、大なるものには松生ひ藤のからみて咲けるあり、これが静かなる水の上を、心のまゝに游行する、然り心のまゝだ、或る者は東し、或る者は西する、行合へばとて突き當らず、左右に開いて行違ふ、だから風のためならず水流のためならず、やがて遊び倦きて各々岸に著く、岸にも草、鳥にも草、草つゞきで目境なく、つまり元來沼の中に鳥は無かつたわけとなるといふやうな意味であつた。

そこで先年米澤に来た時、やはり今日の連れの齋藤さんを誘つて行つて見た。折ふし秋の沼は寂莫として波なく、大きな鯉が寄つて来ただけ、待てども待てどもなんにも動かず、歸つて来て土地の老人に聞けば、いや、あの鳥の動くの

は初夏に限る、秋は萱や蘆の根で繋ぎ合つてゐる、春の頃、この根を切る行事があつた筈です、と教へてくれた。この度山形に入つて、先づ漆山の多勢氏に立寄つた時、奥さんに聞いて見ると、この奥さんは秋大沼に行つて、しかも鳥の動くを見たといはれる、何やら分らぬ事、とかく運次第、車は山形市を突つ切つて、最上平野の青田を走り、左とかいて、あてらと讀む左澤の町、最上川を渡り、小山續きの路となり、やがて大沼稻荷の下に著いた。

大沼は木立四面に立ち覆ひ、下草は蘆荻、さう深くもあるまいが、何となく隠々として、廣さは忍ばずの池の四分一ほど、一ヶ處赤松の老木の間に、ちと打開いた場所あり、一軒の茶店が見える、稻荷さまから木下蔭を潜つて、先づこの茶屋に来て、動いてますか、とおかみさんに聲をかけると、動いてますよ、と答へた、大恐悦、すぐ岸に出る、出島の鳥居の前に四五尺のと、二、三尺の

と並んで浮いてゐる、出島の左の奥のも、今出て來ますよと、おかみさんが指さしてくれた、赤松の根に腰かけて、ビールを抜いてもらつて、先づ一杯をあげながら、二つの島を見てゐる、動いてゐるやうでもあり、じつとしてゐるやうでもあり、甚ださだかならず、するとこちらの岸近く大きな鯉が浮いた、三尺もあらうか、餌が少いか痩せてゐる、おやおや、鯉も年を取ると、頭が禿げるものと見える、と、ふと目を移して、心付いて島を見る、小さい方がいつの間にか無くなつた、よくよく見れば右手の岸に付いてゐた、大きい方が左に寄つた、寄る、寄る、進行が目に見える、當然二つの島は各々異なる方角へ動いたわけ、や、出島の奥のが沖へ出た、二、三間の距離を動いた筈、以前の大きいのが小さくなつた、さうでは無く、廻つたらしい、いづれも上には蘆を茂らしてゐるが、この島は一方の端に羊齒しだを生やしてゐた、それが見えない、

まだ廻る、反對の側から羊齒が出た、廻りながら此方へ近づいて来る、出島の鼻と、向ひ合つた岸の木の幹に、目分量で直線を引く、この直線の彼方にゐたのが、やがて直線を越えて来たでは無いか。

乗つて来た車の運轉手が、帽子を取つて、何遍か此處へ参りましたが、今日初めて、おかげで拜見致しましたといつた、おかみさんに、数の多い時、いくつほど浮いたかと聞くと、三十位は出た事ありますといつた、大きいのでは三間位のもある由、この全員總出場を眺め得なば、さぞ面白いだらうと思ふが、それは慾だ、これだけで満足、山水の眼福、歸りませうと振り返ると、廻る鳥は再び遠くなり、出島の奥のは、いつのまにやら岸に戻つたか、姿は見えなかつた。

(十二年)

## 湯西谷

今朝ラヂオの、戸隱の野鳥放送を聞いて思ひ出した、此間行つた野州の湯西谷のこと、彼處でもよく野鳥が鳴いて居た、今も縁樹の山中で、盛んに鳴き交はして居るだらう。

鬼怒川温泉の奥、川治で湯西川が鬼怒川に合流する、此の湯西川を遡つて行くのだが、川治から一里ばかり行つてから、溪流はあの邊の山地に似合はず、約一里半程の間極めて平坦に流れて居る、是が昔「いかり沼」の在つた跡、享保の缺潰で平たい湖床が出たわけだ、友人と二人で、人夫君に荷を負はして此

の道を上つたのは、五月の初めであつた、廣い砂原と灌木の若葉の間を川千鳥が遊んで居た、對岸の山で筒鳥の聲がする、實は私は筒鳥の聲を知らなかつた、友人が戸隠山でよく鳴いたと話したので、日頃山人を以て自ら任ずる手前、是非其内戸隠へ行つて、此の聲を聞いて置かうと思つて居たところ、あれが筒鳥だと教へられて見れば、子供の時から故郷の山で耳に覚えのある聲であつた、たとへばお袋に叱られて、ベソを搔いて裏の林に立つて居ると、遠いやうな近いやうな、穴藏で樽の尻を叩くやうな響きで、ボンボン、ボンボン、とやつて居た、あれだ、尙又考へ出せば、みちのく平泉、毛越寺の松林の中でも聞いて居た、あれであつた。

河岸に若い人と子供と四五人居て、長いヤスで魚を突いて居た、立寄つて見ると、既に十數尾の川魚、岩魚の八寸もあるべきを提げて居る、それを三びき

賣つてくれ、何程でよろしいか、さやう、相場は一圓二十錢が程だらうが、一圓に負けて置く、代りに煙草を持つて居たら、五六本置いて行つてくれ、と云ふ取り引きをした、川は段々急流になる、一つ石、中内戸の小村を通る、日頃いて山といふ山皆夕霞みとなり、其中に山櫻、あんな夢のやうな美しい山水を、近頃見たことがない、四里半と人は云つたが、五里以上歩いたやうな足加減で、湯西の温泉に着いた、持參の岩魚を魚でんにして貰ふ、岩魚は山中の珍重だが、實は鹽焼きでは脂氣乏しく美味ならず、魚でんが一番よろしいと思ふ、此の温泉は茲だけの發電で燈火を得て居る、家によつては石油ランプ、石油ランプは現代に於ては、まことになつかしい。

我等兩人が此の山中に來たのは、山の春の草木から、仕事の材料を取る爲、今が頃合と計つたわけだが、丁度思ふ壺で、山櫻、葉の権なる淺緑なる、桃も

咲き残り、珍らしいのは山梨の花の多い事、それから辛夷、躑躅は苔多く、あけびの紫黒の花房、朴の木の芽の開きかけ珍らしいもの、椋の木の芽の銀縁と純朱の配調は更に目を驚かした、湯西の谷は、此村で左右へ開いて、相當の廣さの耕地あり、その爲に明るく静かな一境をなして居る、土地の人が又、どう云ふつもりか、花咲く木を伐らで置く習はしと見え、兩方の山からして耕地の處々、前記の花共が咲き誇つて居るありがたさ、朝から出あるいて、山に入り谷を渡り、畠に腰を据ゑて飽くまでも春光を賞するわけだ、筒鳥は此處でも鳴く、かけすがリヤアといふやうな聲、小げらは小まめに木をめぐつて、是も小さな聲で鳴く、山鳩は、あのもろこし寒山子の詩に、嘯々として黄老を誦す、の句がある、まことに半白の老道士が經を誦して居る聲だ、「ひたき」は私の故郷で、山のおかぐらと子供は云ふ、いろ／＼な調子曲折を交へて囀づる爲だらう、林

の中で、キイ、キイ、と鳴いたのを、友人は「も、んがあ」だと教へてくれた。

私も蕎麥好きだが、連れの友人は蕎麥のマニヤで、殆んど三度々々連日やつて居た、此處の蕎麥は本格だ、是を喰はぬ者は馬鹿だと云つて居る、宿では又、蕎麥ばかり上げて置くやうで氣になる、と云ふ、昔山國の旅、蕎麥名物の處では、最初に客人と、飯泊りと蕎麥泊りの協定を行つて、蕎麥泊りの方が宿料少なかつた由、此處には水田なく、米は馬の背で運び上げる故、それで蕎麥のみ喰ふ客を氣の毒がると見えた、温泉は三四ヶ處、いづれも流れの岸に湧く、だから大水が出れば引くまで休みだらうが、清流の瀬波と同じ高さに頭を出して、河鹿を聞きながら湯に漬かつて居るわけだ。

私共の宿の名は伴久と云つた、宿の湯を藤鞍の湯と云つて、是が元祖だ、藤製の鞍を掘り出した由緒の由、其の藤鞍を見せて貰つたが、藤の大木を刻んだ

もの、キルクのやうに軽く、黒み古びて居た、古文書も若干、讀んで見ると、天正年間伴對馬守なる人此地の主であつて、子孫連綿今に到る、上役所への相續の書き出しめいたものには、田畑十二石、湯一處、乗鞍、轡、鎗二本、などとあり、かゝる山奥にも既にして四百年の人生が記録されてある、下野國鹽谷郡栗山村は、平家落人の落ちて來て成れる村、と云ふことに以前から傳へてある、平家の落人の話は方々にある、ともかく昔、一族一門の集團的移住が行はれた事あつたらう、此の湯西も栗山の内だ、彼の上州尾瀬から鬼怒を經、栗山川又の湯より、日光に出るコースは面白い道筋だが、其の川又から山越し五六里で、此の湯西へ出て見るも亦一興かと思ふ。

あすは歸ると云ふ日の夕方、友人と、酒と豆腐と、鮭の鱶と蕨とを提げて、耕地の芝の上で花見の宴（宴はちとをかしいが）、をやつた、もろ／＼の花と鳥

の聲、三四日の馴染みだが、如何にも立ち去り難い風景、耕地に働く人は女ばかり、乳呑子が畦の上で、母の仕事着の襟を開くのを待つて居る、男は大抵山仕事、伐木炭焼き、經木削りの小工場も谷の中で、水力利用で働いて居た。

あくる日の歸りの路は雨となつた、例の溪沿ひの道、青葉の中に瑠璃、鳥籠の中のと違つて、驚くべき群青の光彩、忽然として慈悲心鳥が鳴き出した、シユウンと耳に澄み通る聲、聲を求めて藪かけから中腰に覗くと、一本の木の upper 枝に留つて小雨の中で、鳴き續ける姿が見える、夕方川治温泉、川治は鬼怒川から見て山奥だが、湯西から出て來れば、早東京の一角に着いたやうな心だ。

(十四年)

## 芋錢傳

三十餘年の昔故、芋錢茂吉翁と私と誰の紹介で始めて會つたやら、記憶さだかでない、田岡嶺雲であつたらうか、嶺雲は水戸のいばらき新聞主筆の頃から懇意にして居たらしい、嶺雲は士を愛し才を認める善き先輩であつた、芋錢の畫才と人柄を喜んで平民新聞に挿畫かく世話をしたやうに覺えて居る、三十歳そこくの頃だらう、芋錢子の漫畫生活は之より始まつたのだが、此の漫畫が次第に轉化して、後の芋錢一流の水墨となつたわけだ。

本多錦吉郎翁は洋畫壇の大先覺で、敬すべき人格者、此の門に入つた芋錢子

は、二十に足らぬ少年であつた由、辰年明治元年生れだから、同じき十七八年頃に、彼れはおぼつかなくも西洋畫術を習ひ始めたであらう、半世紀以上の過去の、洋畫の教習法が、どんな様子であつたやら、蒼茫たる年月、私にも推想出来ない、やゝ後年二三枚の水彩畫を見せられた事がある、色調弱く、常識的な綿密な寫生、平民新聞紙上の漫畫とは、およそ似ても似つかぬ物であつた、物體を見つめ追ひつめて行く逐條記録は、結局芋錢子の性に合はず、頭の中の記憶印象を、自身の好みにまかせて、毛筆で再現簡化する方愉快であつたらう。

其頃の挿畫は、うす美濃に描いて直ぐに木版の版下にする、其版木を新聞雜誌社から貰ひあつめて、畫集を作る、同じやうに漫畫を稼ぎにして居た私は、漫畫一年をこしらへ、芋錢は草汁漫畫を著はした、俳味的、牧歌的、神仙談的、支那的、怪談的、筆の肉厚く、如何にも落着いた畫風、時に文字を題する、文



字もみごとな物、あの位書畫一致を立證せるものは無い、拙著「漫畫一年」などは年も下だが、内容更に弱輩至極比較にならぬが、其頃既に彼れは牛久村に歸住で、元來地味な世渡り、私の知り合ひの本屋に話をして出版させた、本屋の主人危なかり、損をした時の保證人無くばいやだと云ふ、友人の水戸の實業家と私と、連名で損害保證の一札を入れたが、珍らしい出版様式、もちろん相當に賣れたと見え、後日のいざこざは無しにすんだ。

始めて彼れの牛久村の家を音づれたのは明治三十八年の頃かと思ふ、勤めて居た雜誌社から、水郷の繪行脚を云ひ付けられて出掛けて、彼れを誘つて霞が浦に遊んだ、初秋の一夜の客、奥さんは秋蠶の世話をすましてから、うどんを打つて馳走してくれた、息子達はまだ少さく、芋錢四十近き年配、縁側に背を丸めて石油ランプを掃除する、侘びた閑かな生活を、不安勝ちな東京住みに比

べて、ひどく羨ましき物に考へた、だが、彼れは未だ此の田園暮しに、丸切り落付き拂つて居たわけでは無かつた、なるほど逐條寫生の西洋畫より、毛筆の漫畫はおもしろい、おもしろいが此事に一生を費やさうとて畫家となつたらうか、本繪、本繪と云ふ言葉が、向上心を失はぬ漫畫家挿畫家の良心を刺戟する、我れに本繪作る質がある、漫畫挿畫は此の質を蝕ばむであらう、本繪の勉強。

漫畫も挿畫も、それで一生を終つてよろしき物ではあらうが、其頃の連中然うは思ひ切れず、芋錢子も其の數に洩れず、再び村を出て東京芝に親類があつて、其處へ腰を据ゑて本繪の勉強にかゝる、と云ふ話を聞いて、あの人も奮發だなど思つて居るうちに、何時の間にか又牛久の沼人となつて居る、二度ほど覺えて居る、今から思へば當然の次第、彼れに西洋畫の満足ある筈なく、東京

の空氣彼れを安穩にして置く筈なく、侘びて閑かな村の家は手近なり、思ひ疲れて歸去來をやれば、田夫漁父沼澤林藪彼れの嫌ひな物一つも無し、漸々に彼れは郷土に生かされ、郷土を物にする方に心に向けたであらう。

村に落着いてから彼れは、唐紙畫箋類の半折色紙に其時々の興を遣る、之を以て當時日本畫界の一隅に割據しようと思ふ如き野心あるわけではなく、好き故描く、望まれて描く、時に酒にかはり、時に器物にかはり、餘り高くなきお金にもかはつたらう、陶淵明は五斗米に腰を折りがたく故郷に歸つた、故郷に若干の田畑あつたが、尙多少躬ら耕さでは足らぬ程度の如く想像される、芋錢子にも若干の恒産はあつた様子だが、奥さんが畑に居る姿を見かけた話故、是亦陶淵明の生活と同程度であつたらう、俳畫漫畫の芋錢の名は、既に相當に聞えて居て、尙且つ半農半畫の日常、當代の畫界に珍らしくゆかしき次第だ、其頃

より沼の河童頗りに畫裡に入り来る、あんたは河童の實在を思つて居るのですか、と或時聞いて見ると、あれが實在しないで云ふ證據がありますかと反問された、又、利根川の堤防工事の節、河童の骨を掘り出したと聞いて、行つて見たが、嘴の尖り背中の中甲羅、昔文晁が、生捕られた河童といふのを寫生して置いた、古本の挿畫で見たのだが、それに少しも違つては居なかつた、とも話して居た、芋錢子に左様に説かれても、どうもあの、河童がまことに居れば面白いとは思ふが、まことに居るとは考へられず、だが、あれ程の畫家に、あれ程多く姿を寫されて見れば、河童連中も、實在以上の實在かも知れない。

半折小品の展覽會を、芋錢未醒連合で、東京と大阪の三越でやつたのも、三十餘年の昔となつた、私のは漫畫の化けたやうな物、彼れのは次第に本繪に近づいて居た、田端の私の住居に出て来て、泊り込みで、八疊の座敷で毎日二人

で製作した、私は手が早く、描いては破り描いては破る、彼は筆遅き代りに破らず、出来高は結局同じ程、大阪にも二人同行、あちらには俳人のつき合ひ多く氣持ちよく歓迎された、其頃二人共まだ硯墨の吟味など極めてお粗末、顔料もいゝ加減なわけ、表装してから胡粉が落ちたなどの騒ぎあり、東洋的日本的なるは、お互に子供の時から然うなるやうに歩いて來たわけだが、彼の明窓淨几筆研精良など云ふ境界にはなか／＼參らず、村夫子と貧乏書生の、氣任せ興に乗じただけの藝だ、もちろん芋錢子の方、既に従來到達點の暗示現はるゝ物少からず、大阪展の賣れ残り、唐紙全紙の「寒念佛」を所望して、今以て時々掛けて見るが、おもしろい作だ。

珊瑚會の展覽會を、横山さんと同行で見て、横山さん、芋錢子の繪に興を催

し、それで二人の紹介で院展同人に迎へた、其秋出品、招待日に其の出品の前に行く、誰であつたか同人の一人、小杉君、此の繪はうまいのかい、と云ふ。紹介人少なからず困つた、まづいと心にとがめたのでは無く、先入の同人に反對あるを感じて困つた、後に院展の名物ともなり、一異色と珍重されたが、當時院展の諸作家、今よりは院風濃厚であり、其中で切磋して居たわけだから、芋錢子の物に首肯出來なかつた事も、無理ではないと考へる、側では又、芋錢さん院展の繪は少々堅くなつた、矢張り野に置けれんげ草だと氣を揉む人もあつたが、芋錢子とても畫家に相違なく、廣い場所で入り込みで並べて見て、必ず悟る所もあつたらう、氣のやさしい人故、初の出品で多少は緊張もしたであらう、只くれてやる小品の方、彼れには全人格的の物あつたと思ふが、年一回の展覽會出品は、作家として一年の總決算の如きもの、有るだけの力を出し

て見る機會、晝仙芋錢と雖も全く無用の努力で無く、紹介人の私共も餘計な骨を折つたとは考へられない。

樹下石人語と題したるもの、院展の出品にあつた筈だが、たゞ見れば木の陰の石像共だ、久しく見て居ると、成る程彼の石像共は話して居る。いや、石像共よりも石像を蔭すところの、二三大本の大木の方凄味あり、此の方がより多く人語をも發しさうに感ずる、彼の人の長く大きな頭の中には、多分の幻想を藏して居た、ずつと昔話した事だが、或時東京から牛久へかへる、夜になり、停車場から宿を出抜けて村までの間が畑だが、月なき暗夜ながら、どうやら蹶きもせず静かに歩く、と、忽然としてあたり一面銀色の世界となつた、桑畑大根畑、桑も大根も見覚えのまゝ、銀色だ。是はたゞ事で無いと思つて、同じく銀色の草の上に腰を据ゑ、しばらく眼を閉ぢ息を鎮めて、さて眼をあけて見ると元

の暗になつて居た、狐狸の業か、と自身は云つて居たが、私が他で聞いた例には、硯友社の文人、奇才を鳴らした川上眉山は、曾つて深更まで筆を把つて居て、便所に立つて手洗の窓を開くと、庭の中の一本の松が、根から幹から葉の尖まで、すべて銀色になつて、ありありと見えて居た、月もなし、灯もささず、不思議に思つて庭へ下りて、袂の紙を小捻りにして枝に結んで、さて其夜は寢た、あくる朝起きて直ぐに庭に出て見る、小捻りはちやんと結んであつた、此の眉山は後年故あつて自殺したが、神経の異常に鋭い人であつた由、芋錢子とはともかく長命、人に對してさやうに過敏な神経を働かせたとは思はれない、彼の神経は専ら沼澤林藪に鋭敏であつたらう、銀色の桑と大根を見た目に、川童が見えぬと誰が云へよう。

芋錢子の人に接するや、どんな話でも静かに聞いて居る、自ら語るのも静か

に語る、聞くのも語るのも、最も興多げだつたのは、山水の話、高德の話、勇士の話、奇談、怪談、近頃芋錢子の事を記したもの、中に、知り合ひの人の名を呼び捨てにして居る處があつたが、あの人は陰でも人の名の下には「さん」をつけて呼んで居た、さうだ、と云はず、誰に向つても、さうですと云ふ、まことに叮嚀謙虚の姿、生前から既に仙人扱ひにされ、死後いよいよ隱逸の偶像にされたが、自ら一代の高士とは思ひあがらず、白眼をもて世に人に對しては居なかつた、慕ひ寄るものの誰れをも拒まず、頼まれれば斷り切れず、其爲に奇貨おくべしとなす者を生じ、苦しい時の神頼みする連中から、よき餌となつた事少くは無かつたらう。困つたとは思ふが、腹は立てずにすましたらう、彼れの最も喜んでつき合つたのは、都型でなくて田舎型、五分もすかさぬ分別者でなく、剛毅朴訥、單純なる漢子であつた、さう云ふ人々と酒を飲んで、話をさ

せて、おもしろくなつて扇面などに物をかいてやつて、喜ぶ顔を見るのが又なく愉快であつたらう。

取手から利根川を越した大堀の村の、宮文助といふ老人、芋錢子と同じ年で、随分仲よし、其の縁で私も親しい間になつたが、角力になつたら大したものであらう、と思ふ程頑丈な骨組み、五斗俵を片手で差す、土方に喧嘩を賣られて、セメントの樽を手玉に取つて追ひ散らした、利根の水運盛んなる頃は、上り下りの船頭の元締めをした家柄で、若い時から劍術で鍛へた、以前なら大物の土豪で鳴らすべき骨柄、憐れな話に涙脆く、世話もすれば財布もはたく、曲つた事に辛抱ならず、屢々其の武力を發揮する、此の資格が芋錢子に喜ばれぬ筈は無い、芋錢子とは全く違つた物の如くであつて、實は盾の両面、生ひ立ちと境遇が入り替れば、芋錢子もあの如くに行つたらう、あらみたま荒魂とこせみたま和魂だ、取手の飲屋

の二階を出張所にして居て、月見だ花が咲いた、利根の鮭がとれる、と云つては呼び出しをかける、芋錢翁は牛久から、東京からは公田連太郎翁、故人森田恒友、私など集まつて酒にする、時々大會を催し大利根の波に舟を浮べる、木村莊八中川一政岸浪百艸居、或は淺野長武さん三成重敬老、御役人では立田清辰さんなど連名、藝者は若松染太夫。

此の染太夫と云ふのは、目方三十貫、大きな肉の塊りのやうな男であつたが、是亦芋錢子と同年の辰年、自ら説教節の本流を守ると號して居た、その如くであらうと思はれる拙からぬ藝で、元は本所あたりで暮して居たが、世渡り下手で一向賣れず、震災で故郷の取手に逃げて来て、それなりに居付いた、太棹の三味に弾き語りで謠ふ文句は、當初然るべき人が綴つたのであらう、なかなか面白き筋道、曲目の中、最も多きは義經に關したるもの、五十段もあると云つ

て居た、悲しさとははれさと、勇ましさをかしさと、彼の奥の細道で、芭蕉翁が聞いて賞めた、奥淨瑠璃なるものも、こんな種類かと思はれる。母子の情を寫して人の涙を誘ふ事多く、男女の間を語るのは稀であつた、其邊最も芋錢子文助老を動かしたであらう、染太夫、此の兩同年の世話で、ともかく取手で日を過ごして居た。やがて文助老も亡くなり、染太夫も相果て、十年ばかり、取手の歡會も斷絶して、最も寂莫を覺えたのは芋錢翁であつたらう。

誰にも取り外しはある、芋錢子も一度取り外して、酒席で外狩素心庵氏との遣り合ひ、芋錢子が素心庵の名刺を投げたのが始まりの由、噂に聞いて珍らしき事もあると思つたが、前に云つた荒魂和魂で、どうやらした機みに、下積みになつた荒魂が、ふいと頭を出したであらう、果ては相抱いて泣き、而して後に大笑したと云ふ、らちも無い話だが、此の十年も前の事件を、而も私が知つ

て居るかも知つて居ぬかも知らぬのに、一昨年冬であつたか、久しぶりで牛久を音づれた時、何の切つ掛けもなく云ひ出して、甚だきまり悪さうに見えた、聞く方ではその方が奇妙で、あいさつに困つたが、まもなく發病、して見ると既に或は心身の調子よく無くなつて居たかと思ふ、今にしていたましく回想する、それ切りで今度の長逝となつたわけだが、其の時の同行の友人、初對面であつたが、かへりの途中頻りに彼の翁の異相を嘆じて居た、なるほど云はれて見れば、彼の長く大いなる頭、いよいよ長く大きくなつて短軀の上に据わり、白髮の髻も人離れして、澄んだ目が、外界よりは多く内面を見て居る如くであつた、いや既に他界を見て居たでもあらう。

其の同行の友人と云ふのは、北京に行つて居る湯澤三千男氏で、内務省次官をやめて居た頃、此人御役人中の趣味家で、芋錢翁の書に惚れこみ、一二幅所

藏したき故紹介しろと云ふ、丁度暫く雙方共無沙汰の折故、案内しようと思つた、佐貫の驛から沼へ取り付きの水神の茶屋で、寒雨蕭々たる沼を眺めながら、晝飯に一盃を用ひたわけだが、此の水亭は芋錢子おなじみの家、以前一二度、牛久を音づれて歸りに、沼の岸を送つて来て、此處で又酒にして分れた覺えもある、沼は鴨の獵場で、ずつと昔鐵砲をやつて居た頃、此の家に泊り込んで、沼に無駄玉を打ち散らした、あの丘の上に芋錢子在宅かも知れぬ、立寄つて見ようかと思つたが、ふと「わが春の小鳥打つたと叱りけり」とあつた彼れの一句を思ひ出し、ちと小恥かしく止めにした覺えもある。

又、アトリエの藤本氏の話に聞いたのだが、同氏牛久へ行つて、かへりに同じく此の沼道を送られた、折ふし春の末、芋錢翁が少し跡になつたと心づき、振り返つて見ると、道の右は沼、左は田圃、其の田圃の、しよろしよる水にかが

み込んで、頻りに見入つて居る、何を見て居るかと小戻りすると、彼れは其の水の、さゝやかな瀬になつた處を、目高の群れが、上らうとしては落ち、又上らうとしては落ちるのを、餘念もなしに見入つて居た、子供のやうに興に入り、又目高それ自身になつて、此の小さき物の努力に力を入れて居る如くにあつた、と云ふのだが、あの沼が彼れの天地であれば、目高も草の芽も、水底の泥でさへも、身邊不可分の親身であつたに違ない、龍門三級の瀧の下に、黄河の鯉が集まる、三級上り切れば化して龍となる、龍となりたさに、毎年集まつて来て、上つては落ち、落ちては上らんとする、と云ふ話がある、芋錢子は其時、必ず此の龍門の古譚を思ひ出して、見て居るうちに、しよろしよろ水は三級の大瀧となり、目高は八尺金光の鯉となり、上るか、落ちるか、送るべき客を忘れて居たであらう。(十五年)

### 山居の鳥

妙高山頂の残雪次第にうすくなり、裾野もどうやら初夏となる、花は小梨山櫻やしほなどから、箱根うつぎ蓮華つゝじ、山躑躅と、代つて来て、野ばらあやめに及ぶと、東京からは渦水の騒ぎ、暑熱九十度を越すたより、山中の鳥共も、囀り合つてばかりも居られず、親となり子を養ふいとなみだ。

もず鳥の雛が、親鳥に連れられて、灌木の間に居たのを見付けた、親は宮本二天得意の畫題、天を刺す尾さきに、劍氣を含んで勇ましいが、雛は何やら可愛らしく尾もまだ短い、其短い尾をば、天然の習ひに従つて上下左右に動かし



て居る、笑ひたくなる姿だ、もずは元來猛禽で、之が飛んで行くと、椋鳥山類白などはおろか、容積に於て三倍もあるべき、かつこう鳥さへ枝を譲つて避ける、こやつが近所に棲んで居ては、他の鳥共の生活が安定しない、家のまはりの木立にも、寄り付きたく無くなるだらう、下の村の少年の空氣銃などで、ボンとやつて貫へまいか、など、考へた事もあるが、この雛のあどけない姿を見て、忽ち惡念を翻へした。

いつもの年より今年は、椋鳥が多く見える、小蟲やうの物を含んで飛ぶのを、屢々見かける故、彼等の巢にも子供が待つて居るかと思ふ、椋の鳴聲は甚だ雅でないが、以前飼鳥にして置いた一羽、何とも優しい細い音色で、鶯などの口真似をした、ほん物より品よく物靜に聞えたのを覺えて居る、一年ほどで死んだが、小鳥は人間よりは短命だから、いろ／＼飼つて置くのが、次々に死んで

行く、よく馴れたのは、後々までも思ひ出されて哀れだ、異類の動物と云ふよりは、も少し身近い情合を感ずる、此の四月に鴨鳥が落ちた、あれは十年も居たらうか、誤つて籠から出しても、ちんと歸つて來たし、籠の傍を通ると、頻りにさわぐ、指を入れて翼に觸つたり、脊を撫で、やると靜まる、つまり構つてくれと騒ぐわけ、人間の愛情を確める事になる。

駒鳥はいつかな馴れず、どんなに長く飼つても、油斷をすれば籠をぬける、ぬけたが最後歸つては來ないから御用心、と小鳥屋さんが云つて居た、若しほんとにさやうな性癖あるものとすれば、楚囚となつて山林の志を失はざるものだ、是亦愛すべきと思ふ、白鷗の馴れ易からざるは昔から云はれて居る、李白、胡公なる人に白鷗を無心してやる詩の序に

聞く黄山の胡公雙白鷗あり、蓋し是れ家雞の伏するところ、小より馴狎して

つひに驚猜なし、其名を以て之を呼べば、皆掌に就いて食を取る、然れども此鳥耿介にして尤も畜ひ難し、予平生酷だ好めども能く致すなし、而して胡公すなはち我に贈りて、唯一詩を求む、

と書いてある、李白若い時山東の竹溪に隠棲して、友人と共に鳥を飼つて居た、といふ話だから、此の酒中の豪傑にも、早くから鳥について趣好あつたと見える、耿介にして尤も畜ひ難き白鷗の卵を、雞に抱かせかへしたので、よく人に馴れて居ると聞いて、欲しくなつたものだらう、私も數年前此の白鷗の雌雄を飼つて居たが、ひどく馴れない鳥であつた、其の卵を三つ四つ集めて、親類に頼んで倭雞に抱かせた、皆かへつて雛になつた、茲まで黃山の胡公であつたのだが、其親類の細君が、今迄の雞の雛を育てた習慣で、不用意に籠を持ち上げたので、耿介なる雛共は、一散に逃げ出して、雛をくゞつて皆何處かへ行

つてしまつた、多分近處の犬猫のよき獲物となつたわけであつたらう。

先日春日山の古城に行つて見た、下なる谷のあたりで鳴く鳥を、とんがらし鳥だ、と山妻が聞き付けた、夫婦の郷里は日光で、子供の頃に聞き覚えがある、私も成程あのとんがらし、赤せうびんであらうかと思ふ、郷里ではあれが來ると、火難の惧れがあると云つて居る、赤倉の下の田切の村にも、此頃此鳥が來て鳴いて居る、村の人は病ひ鳥と云つて、不祥な物にして居るらしい、餘り多く見掛けず、嘴から全身の褐朱色、あれが新緑に映つて朱色になる、之を無氣味に感じ、火災病難に持つて來たらうが、當の赤せうびんには氣の毒だ、古河古松軒は其西遊雜記に、豊前彦山に於て、全身真紅の鳥を見たるなり、と何やら異鳥に出會つた如く記してある、此のとんがらし殿であつたらう、一度飼つて置いたが、何にせどぜうの生餌を限りなく喰ふ、其臭氣當りがたい、夜は最

も距離のある玄關の土間に置いて、立て切つた障子を通して、しん／＼と鼻を突いて来る、辛抱ならず引取つて貰つた。

子規が啼く、かつこうが鳴く、平安朝の歌人は、何であのやうに此の「テツペンカケタカ」の聲を珍重愛惜したであらう。蜀帝魂、血を吐く、と云ふやうな文學的履歴からであらうか、私にはかつこうの鳴き聲の方が、いかばかり有難いか、友人足立源一郎君は、尾瀬沼で此の子規の亂鳴を終日聞かされて、あんな喧しい非音樂的な鳥は無い、と云つて腹を立て、居た、かつこうが鳴く時は、身を平めて肩を張り胸を出し、尾を反らせる、其姿はまことに賞嘆すべきだ、子規の啼く姿を一度見たが、かつこうと同類の鳥であらうのに、彼れは直立姿態で木の上に啼いて居た。

或朝、窓の上の木梢でかつこうが鳴き出した、姿は見えないが非常に近距

離だ、近距離で聞けば「カッコウ」、「カッコウ」の聲の間に「グルグル」と云ふやうな喉音が交つて居る、又近い落葉松の林の間で、雌雄とおぼしき二羽のかつこうが、鳴き交はし戯れ翔つて居るのを見た、「カッコウ」と云ふ聲に「カカカカ」と云ふ聲もする、「カッコウ」が「カカコウ」とも聞きなされる、假に彼の「カカ」と云ふのが雌とすれば、すなはち嗚だ、すると雄が、嗚來う、と云ふ事になるか、いや冗談です。かつこう鳥を本字で何と書かうか、郭公と記したら、ほととぎすとルビをつけられさうだ、羯鼓鳥など、考へて見る、何やら似合はない、閑古鳥と云ふのは、俳句の方で、山中幽寂の氣持を、鳥の聲に表象せるもの、如くに考へる、鳴聲の幽寂なる筒鳥に若くは無いが、字音はかつこうに近い、と云つても「カッコウ」の聲を「カンコ」とは聞きなし難い、支那朝鮮で、かつこうを布穀と名づけたのは、字音と農時と併せ得たものだ、支那人は

物に名を付けること、まことに上手、就て思ひ出すのは、山海經といふ本に、もろ／＼の鳥の記事のある中に、「其聲自ら呼ぶ也」と云つて居る處考へて見ると妙なわけになる、つまり最初鳥の鳴聲に字をあてはめて見て、其鳥の名にした「かつこう」だから郭公とつけ「ひよ」と鳴くから鳴としたやうな類だ、それから此度は逆に行つて、あの鳥は自分の名を鳴いて居るのだ、と云つて居る、どうも勝手な話、鳥の聲は簡單だが、あれで相當の用を達して居る、人間のつけた名を鳴いて暮しては居らないだらう。

以前此處の高原には、鶉が多かつた、近年とんと見かけませんと、村の老人が話して居た、高原の状態は何年にも目に見えた變化は無いやうに思はれるが、それは人間の了見で、鳥から見れば、此の邊も今はちと住みづらくなりました、と云ふ點あるかも知れない。さう云へば今年は、椋鳥が多い代りに燕をあまり

見かけない、燕で思ひ出す、越中宇奈月温泉へ乗り換への驛、何と云ふ驛であつたか、プラットホームの腰かけに居た時に、前なる電線に燕が澤山おしやべりをして居る、離れた電線に一羽、是が全身真白の燕だ、珍らしい物が居たなど見て居る、その白燕が、こちらの群れの方の電線に飛んで来る、近くに居たものから、一羽立ち二羽立ち、皆立つてあちらの電線に移る、白燕は獨りになり、やゝしばらくして、又あちらの群れに行く、又次々こちらへ飛んで、白燕は又も獨りぼつちだ、人間の目には珍らしいが、同類には此の白ツ子は嫌はれ物と見えた、かあいさうに。

又燕で思ひ出す、末の子を毎年の夏休みに此の赤倉へ連れて来て居た、空氣銃を與へて置いたが、それで父子で的打ちをする、どうもおやぢ程に中らず、そんな事ではいゝ兵隊さんに成れまい、などゝからかつてやつたが、實は少々

亂視であつたのを、其時心付かなかつたわけ、末の子は口惜しがりで、生き物ならば打てると云つて、二三日駆け廻つて居にが、とゞ電線に居た燕を落して持つて來た、子供故已むを得ないが、以後は止めさせようと思ひ、燕の常に夫婦連れなること、子を可愛がること、此處で子を育て、やがて秋には海山千里を越えて、親子で南の國へ旅に出る話をした、聞いて居るうちに涙ぐんで來たので、是は話がちと人情にからみ過ぎたと心付いたのだが、其子は一昨年秋に、十二で親を泣かせて死んで行つた、毎年近くの山あるき谷の魚すくひ、山を見ても、谷を見ても思ひ出に耐へられまいと、去年はそれ故來なかつた、今年は新らしい孫を携へて來て、それに紛れて暮す、昨日押入れに探し物すると、奥の方から、例の空氣銃が、赤錆びになつて居たのを見付け出した、困り果てた。(十五年)

## 山 童

親達が安養院といふ寺を借りて居た、日光二荒神社の近くです、そこで生れたわけですが、寺は既にして消失して居ます、四十二厄年の子は、一ぺん捨兒にする形式をとる、といふ習はしがあつて、私は末子で丁度四十二歳の子、隣の家の雨落ちに箆に入れて捨てる、其の家の妻君が拾ひ上げる、それを更に貫ひに行つたのださうです、やんちゃをして手におへぬ時、物置から妙な形の箆を出して來て、是がお前の捨て、あつた物だ、と母に威されて泣き出したのを覚えて居る、あれが一番利きましたよ、なにあの箆などは、どうで出典の怪

しげな物に相違ありません。

育つた家は山中の一軒家です、山中隠棲は父の趣味でもあつたらしい、是は今の私にも遺傳の痕跡を留めて居る、半農生活だ、鹿が庭に來たり、夜狐が鳴いて歩いたり、残雪の上に狼の足跡だと云ふのが時々見えました、狼は用心深く、前肢の跡に必ず後肢を持つて行く、覺えて置け、と父に教へられたが、普通の犬より餘程大きかつた。泊り客などあつて、夕方町へ豆腐買ひにやられる時は、どうも恐れをなしましたな、ふところへ短刀などを忍ばせて出掛けたが、あれで狼と立廻りをする氣で居たかどうか、ハッキリ分りません。

學校から歸つてお八つを貰ふ、と云ふ暮しではない、夏は庭に桃あり、畠に胡瓜あり、山へ行けば熊いちご木いちご、熊いちごは粒が大きく、群生して居るので、盛りには毎日其の藪にもぐつて飽食した、此間其邊を通つたので、季

節も似たもの故、久しぶりで味はつて見たかつたが、見當りませんでした、山中の千疋屋も長いうちには閉店したらしい。いつぞや旅先きで山桑の實に出會つて喰べて見たか、あれをやると齒が赤く染まるので、年甲斐もないと思つて三つ四つで止めにした。

常食には必ず雜穀を混じた、麥、稗、期節によつては里芋、さつまいも、粟、粟飯は東京ではぜいたく飯だが、あの頃は粟のさかりと云ふと、達者な人は山で一日一石も拾つたものです、たゞ拾ふだけだから、麥稗よりは經濟だ、どうかして月に一度位は白い飯に有り付く、その白米のうまさ、つまり今の節米状態であつたわけです、いまに世に出て獨立ちが出來たら、白い温かい飯を鹽鮭でふんだんに喰つてやらう、と思つて居た、世に出てから、鹽鮭以上の上等副食物に出會つた事だが、それから段々年を取ると、嗜好の還元的傾向となつて、

やはり鹽鮭里芋、大根などが一番口に合つて來ます。

其山中の一軒家は、附近一帶御料地へ編入となり、現在は林野局のお役人が居られる、父は晩年再び新らしい小さな住居を、谷を越した高原にいとなんで、其處で八十三の祖父を見送つた、父は酒のまず、祖父は呑み手であつた故、私の酒好きは一代前の繼承となります、父七十二の時、母が風心地で寢込んだのを介抱してゐるうちに、自身の胃の方が悪くなつて、先立つてしまつた、母は長命をして、京城の長兄の家で八十八の天壽です。(十六年)

### 白羊寺海印寺

(一)

十月の十五日、京城に於て忽然として零下三度の霜だ、間着とレンコートの旅人は、之を恐れて南下する、野鳥の渡りと似たやうなもの、大田驛のりかへ、湖南平野の田圃は稀有の不作、穂のない稲田があはれに見渡される。平野盡き山手にかゝつて四街里驛、それから十キロをバスで走る、朝鮮の道の良くなつたに驚く、昔京城から平壤まで日本里六十里十一日がかりで歩いた時の路の悪さ、連れの足の甲が手まりのやうに腫れた、あの頃から見れば大進轉、山も急

速度で青々と若返る、村々も美しくなつた、お百姓も稼ぎよくなつたらう、もつとも今年の凶作は南鮮のみに限らず、内地山陽邊も同様の姿、或は増産を急いで、平常畑なるべき處を田にした爲に、旱害の範圍を餘計にしたかも知れない、結局朝鮮は日本となつて幸福を得た、そこで朝鮮の人々、内地人から鮮人と呼ばれるを甚だ不快に思ふ、朝鮮人と云はずに、朝鮮の人と呼ばばよろしいか、半島人の稱呼もある、此邊注意を要すべきだ。

路は峠を一つ越して狭き耕地を過ぎ、左に折れて谷に入り、谷きはまつて當面に大きな絶壁の岩山を控へた處に、若干の平地を開いて、白羊寺だ、既に日暮れで、僧房のおんどの煙、林の上になびいて見える、我等の宿も朝鮮やどだから、おんどの煖みは心地よろしく尻に感じて來る、朝鮮ではおんどの爲に腰が冷えぬので、婦人病が少ないと聞いた、煖房装置としてまことに結構な

物だか、どうやら心身の不活潑、外へ出て働くのがいやになりさうにも思はれる、朝鮮宿の料理は、あの異常な辛さを除けば、さやうに不味では無い、内地宿の團體客向きの、型ばかりの椀物皿物よりは、質的によろしいかと思ふ、朝鮮料理には朝鮮酒が調和する、藥酒、まつかり、藥酒は少許の酸味あつて支那の老酒に似通つたやうな處あり、まつかりは早造りの濁酒、どちらでも持つて來いと頼むと、そんな物は無い、内地酒なら有ると云ふ、其口振りでは朝鮮酒を一段下のものとして、かかるものを置けば宿の面子に係はるとでも考へて居る如くだ、おもしろい人情、曾て金剛山中で、故郷の山草で食膳に供して珍味であつたのを見付けた、此草を此邊では採つて喰ふか、と案内の青年に訊ねると、そんな物を喰ふものかと云ふ、はて惜しいものだ、内地の山村では御馳走の部なのだが、朝鮮では知らんと見える、と云ふと、煮てなら喰つて居る、と



答へた、複雑な面子感だ、面子は支那人ばかりでも無く、我々にも普通の癖だが、過ぎれば妙な事になり、自他の不自由だ。

あくる日は小春日和で溪山まことに幽静、白羊寺に參る、谷水を堰いて池を作つた岸に、雙溪樓、山門を入れれば真中に大雄殿、それをめぐつて佛堂僧房、和尚もどつさり居る様子、其中の極樂寶殿の建築最も古く、一番趣多かつた、鴨鳥が賑やかに鳴き交はす、此寺も朝鮮三十一本山の一なれば、附近に子寺多く、藥師庵靈泉窟雲門庵など、そちこち山林の間に散在する、藥師庵に行く、溪について登る路、五六間程の距離で、雉子の雌雄が平氣で餌をあさつて居た、縞栗鼠もチヨロチヨロと、路の左右に出没して甚だ人を避けない、溪と別れて急坂にかかる、樹立深々として内地の山行を思はしめる、やがて藥師庵だ、昨日の夕方に望んだ絶壁の岩山の真下に當つて、岩の間に爪立つやうにして此の小

さなお寺は出來て居る、寺の庭は一枚石ですぐに切り立つて、下は木の梢ばかり、見上げると、覆ひかぶさる如くに峨々たる岩山數百仞、松と紅葉だ、岩は花崗石では無い、安山岩であつたやうに見受けたが、後日聞けば流紋石で無いかとの話、變化多端の岩組、寺の臺所は岩窟に續いて、ほとほと落ちる泉滴が、大木を穿つた木槽に湛へてある、飲んで見ると齒にしみる冷たさだ、住持の老僧只一人、毎日此の岩山と木の梢ばかり見て暮すだらう、十ばかりの子供が一人、老僧は枯木寒巖寂莫として終りを待つ姿だが、子供は退屈するだらう、參詣の我等の姿を見るのは、たまさかの事らしく、頻りにはしやいで、案内に連れて上つた村の少年と、岩から岩を走り廻つて居るのが、すぐれて輕捷、猿のやうであつた、此の老少二者の山居を、漢文で書けば其まゝ神仙譚だが、明けでも暮れても岩山と草木の三百六十日を想像するに、平生山中の幽居などを説

いた私として、能く一週間を此の境界に安定し居るだらうか。

二

伽耶山海印寺へ行くには、大邱からバスで十三里程走る、中途高靈の町で乗り換へだ。

「新羅王わが屍を啖へ」

日本の任那駐屯軍の士官伊企儼は、戦ひ敗れて俘虜となつた時に、かう叫んで、新羅王の鼻のさきで屍をたたいて見せて殺された、其跡に今記念碑が立ててある、任那の國の舊都、すなはち此の高靈の町だ、百濟任那はずつと日本と不離の關係にあつた、日鮮同祖論者は、太古は内外の別も無かつた程の密接の間柄だと説いて居る、慶州の新羅朝の朝鮮一統は、朝鮮としてすばらしい國力文化を發揮せるものだが、獨力でやつたで無く、唐朝の外力依存の下に進行さ

れた、此時日本の國力唐朝に向つて不利の情勢、百濟任那を放棄した、もつとも唐朝の初期、支那歴代でも一番優秀な折柄だ、日本は退一步して國內の充實に向つたわけ、關東奥羽にまだ先住民族の強猛なのが頑張つて居た頃だ、賢い決斷であつたらう。

から國のきのへに立ちて大葉子はひれふらすもやまとへむきて

伊企儼の子は父の屍を抱いて斬られ、妻の大葉子は此の歌をうたつて夫と死を共にした。

駕洛國、伽耶國とも云ふ、任那は地名で「からくに」が國名であつたらう、我々の目指す伽耶山海印寺、國名を山號に負つて居る寺だ、バスの終點から一里弱溪流について爪尖のぼり、此の風光が海印寺の自慢、花崗石の峽谷を鋭く割りつけて走り流るる水、松と紅葉、どこやらで見た景色に似て居る、と思へ

ば甲州の昇仙峽に似て居た、松林の下に二三軒の部落あるところ、笈の清水を見かけて辨當をしたためた、大邸で用意した折詰めに半搗米、朝鮮の宿の飯は、内地のよりも玄い、四割減に近いと云ふ南鮮の凶作を控へては、米の節制も餘計真劍ならざるを得ないだらう、なるべく手ぎれいに三分の一程喰べて、あとを手廻りを持たせた人夫に遣る。

海印寺、伽藍七堂大きなもの、尙山門内に何やらの堂の新築をなして居る、春秋の佛日に何萬の參詣ある由、寺も相當繁昌の様子、寶物拜觀に庫裏へ廻つた時、壁に寺領の稻作見廻りの役割りが張り出されてあつた、三四人づゝで四組ほど、村々の檢見に出る手筈だが、此の不作では年貢取る方も取られる方も困つたらう、寶物は見るに足らず、新羅哀莊王三年順應祖師の開基以來六度の炎上を経て居る由、建築も近年の物と見えた、惣じて用材は松ばかり、内地の

杉檜、樺を使つた寺から見れば、恐ろしく粗末な手口となる事、無理はない、支那の宮殿寺觀を思ふ、あれらの構へは實に宏大だが、用材は矢張り松が多かつたやうに覺えて居る、遠見に立派で、近寄れば日本の大工には我慢のならぬ推つ付け普請だ、千年立つて尙隙も狂ひもなき、奈良京都の木造建築のありがたさ、撫で、喜び拜んで敬ふべきものだ。

此寺の大寂光殿のうしろに、三十三間堂のやうな長い版庫二棟に充滿する、大藏經の版本は蓋し稀有の物だ、我朝の延徳二年に設けられてより、是れのみは數度の火災を免れて今に到る、字も立派彫りも能く切れて居る、材料は巨濟木と云ふ由だが、海印寺は之あるが故を以て、半島の寺々に雄視し得ると思はれる、かたの如き大寺故、附屬の子寺、林を隔て谷を越して方々にある、其中の弘濟庵の建築は、古くしてやゝ趣あり、柱などもどつしりと太く重く、本堂

庫裏の入り組みのプランもおもしろい、外から二階へ架けた階子段は、大木をそのままに踏み段を切りつけてあつた、庵のうしろに松雲法師の墓がある、松雲はたしか、豊太閤の戦の時に、僧兵を募つて武家勝りの根強い抵抗を試みた和尚であつた如く記憶する。

谷を越え坂を登つて、も一つの寺へ行く、何庵と云つたやら忘れた、山ふところ木立に囲まれて、夕炊ぎの煙たゞよふ、其の木立の中で、姿は見えず人の梢の枝をたたく音がする、たたく毎にばらと木の實が落ちる、下では坊さんの家族とおぼしく、婆さんと子供とが、籠に木の實を拾つて居る、のぞいて見るとどん栗の實だ、此の實は内地では、喰ふと浮腫を來たすと云つて居るのだが、事によると此の凶作に就ての代用食に充てるものかも知れない、木立越しに伽耶山が望まれる、四五千尺の高山だ、一ぱいに夕日を浴びて、頂上は鶏冠

の如くに花崗石の直立壁、其の裾からは紅葉のまつ盛りだ、歸つて宿に就く、紅濤旅館と號する朝鮮宿、入相の鐘が聞える、先づ本寺の大鐘の聲、つゞいて寺々の鐘、音色皆同じからず入り交つて響き合ふ、末寺の格式に依つて順序ある由、弘濟庵の鐘も鳴つて居るだらう、あのどんぐりの寺でも鳴るだらう、本寺の上手にある由の、尼寺のも鳴つて居るだらう。

紅濤旅館を朝立ちして、紅葉の間に霧ふかく雨しとしとする谷道、同行の水谷清は、手首の處に三つ四つ赤い物をこしらへて、ゆうべ床蟲にやられたと嘆いて居る、さう云はれれば自分も、昨夜足のあたりの痒さ尋常ならずと思つた記憶はあるが、今朝は何ともなつて居ない、昔初めて巴里に着いた晩に初めて襟頸を此蟲にやられて熱を出し、一ぺんに洋行の幻滅となり、明日シベリヤ經由で歸つてしまはうなど、腹を立てたが、今に至る永年の間、いつしか此蟲に

對して免疫性となつたと思はれる。

バスは停留場毎に乗客を増して満員となる、ガソリンの統制いづ方も似たものだ、其中に五六人女ばかりの老若、手荷物をどつさり抱へたり背負たり、車の尻にまで積み込んだ、元來朝鮮の農家は家財道具極めて簡單、之れほどの容積故、一家の移動と見えた、行く先に夫なり伴なりが既に待つて居ると想像する、今年の凶作で、田畠に物なき立退きか、或はさうで無いのか、乗り込む時に數人の見送りあつて、各々涙を含んで居た、高靈に近い處で、一人の中婆さんが降りる、車が出ると車中の數人が、うしろを振り返つて泣く、うしろには車を見送つて、路のまん中に立つて、うす痘痕の顔をゆがあて、手放して涙の流るるに任かせる中婆さん、一番近い縁者で此處まで送つて來たことだらう、かりそめの別れでなく明るい出立で無いとする、之を見ながら妙な考を抱いた、

「婆さんでも泣く時は美しい」「さやうに感じた事、冗談で無いから已むを得ない、車はたちまち遠ざかる、婆さんは小さくなるまで立つて居る。(十四年)

## 揚 州

揚子江を渡つて揚州に向ふ路、淮南の平地は麥畑麥畑、時に菜の花、木といふものは柳ばかり、場帝艷史の曰くには、隋の場帝江都に下るに驚くべき驕奢、十艘の大龍舟を皇后と二人の料とし、五百艘の小龍舟に後宮の美人共を載せた、江蘇の處女千人を徵發して揃への衣裳を着せ、千頭の羊を副へ、大龍舟一艘毎に四條の錦の纜とらづなをつけて、百女百羊を以て曳き舟をなさしめた、折ふし夏の初めで、女共汗をかき化粧を汚す、そこで沿道の人民に柳を植ゑるお觸れだ、柳一株に絹一匹の懸賞だにより、見る見る運河一帯綠蔭清風の地となつた、とあ

るのだが、餘計な心配だが柳がさやうに手軽く根付くものかどうか、唐代に隋堤柳の稱あれば、柳はあつたに違ひない、運河工事の際護岸用に植ゑたのが事實だらう、柳は枯れて又生じ又生じ、青々として何處を見ても柳だが、江都揚州の繁華は書物の上で讀むばかりだ、揚州で一宿した「やなぎや旅館」の敷地、當時場帝が項昇なるものを技師長として、大宮殿迷樓を作らしめた其跡らしいと話して居たが、勿論はつきりした譯でなからう。

ずつと以前、大正年間に揚州に來た時は、日本旅館とともなく、鎮江から日歸りにした、城外の船遊びにも出て見たが、秋の末で柳散り風つめたく落莫たる眺めであつた、此度も船で五亭橋まで行く、お辨當を持つてやなぎやの女中衆がお給仕、事變最中に勿體なき風流、陽春四月柳青く桃咲き、前度とは打つてかはつた光景だ、つい此間までは、手近い處から大砲の音もした話だが、今は

兵隊さん達骨休めの場所であらう、花の下で牛鍋のピクニックをやつてゐる連中もあるかと見れば、巡邏に來たとおぼしき國府方の兵士が草の上で晝寝などもして居る、島の畦に鶏が歩いて居ると思つて、よく見ると雉、高麗雉と稱する奴、兩頬のとさか大きく赤く、頸に白環あるまで見える程近づいても飛び立たず、立木の梢には八哥鳥、内地の雀ほども居て、今營巢の節らしい、法海寺、小金山涂園、堂閣亭榭水をはさんで見えかつ隠れ、まことに平和駘蕩たるものだ、同行の田中氏初めて見る揚州の風光に感嘆して、なぜ抗日などと騒いだらう、こんな好い景色を見れば仲よくして行きたいに、と言ふ、支那の諺に、打たずんば友たらず、といふやうな意味のがあつた、打たねば解らぬ相手だ。

先年の新聞で、揚州五亭橋崩壞の記事を見た、その少し前に西湖雷峯塔、孫傳芳の亂兵の爲に爆破の話あり、どちらも劣らぬ名勝地にあつて、其山水の眼

のやうな建物だから、他國の事件でも限りなく惜しく思はれた、雷峯塔は全く基礎も留めずやられたが、五亭橋は今日見るところ、何の變化もなく依然たる天下の名橋だ、甚だ嬉しい、フロレンスのボンタベツキヨは、橋の上に店屋並んで名所の一つだが、あれなど比べ物ならず、橋上に五亭の屋瓦相連結して、各々數尺の簷牙參差として天を刺し、切石を疊んだ橋脚は串の字の如く出入凸凹して、毎面に迫持せりもちの半圓を穿つ、朱塗の柱、五彩の組物、是等が楊柳桃花と共に倒まに影を春水にひたす、其まゝ結構な一幅の繪だ。

船を繋いで橋にのぼる、橋上は二三丈の高さ故石欄に倚る眺めは又格別、水、寺、漁村、漁舟、魚とる男、洗濯する女、堤上の水牛、煙るやうな新柳の梢越しに見ゆる物、すべて百年千年其まゝぶつ通しの如き春光の下にある、其春光に浴して、石欄の上に男が一人肱枕で横になつて居る、眠りついて寢返り打て

ば、二三丈直立の石壁だが、支那人は日本人に比べて晝寝好きと思はれる、事無ければ忽ち肱を曲げて枕となす、時と處とを選ばない、だが實を云へば、我等の旅に日限なくば、せめて此の揚州に十日も暮して、たまには船中の晝酒ひるざけに肱を曲げ、眼さむれば楊柳桃花の夕陽であつた、といふやうな閑境地も味ひたく思ふ、さうも行かず、田中氏は堤の上で水牛と牧童とを捉へて寫生、石井氏は橋を下つて漁村に入り、私は橋の袂で柳と船とを寫す、今のまゝ何處を寫しても面白いが、或は又、此五亭橋を主なる畫材にして、繁華であつた揚州の古裝の子女を遊ばしめる、時代還元の想像畫で骨を折つて見たいと思ふ。

と、忽ち對岸で二三人立走り、橋の上でも人聲が急になつた、何事やらんと石段を登つて見る、今のさき晝寝して居た男、果して寢返りを悪く打つて、其のまゝ落ちて行つた、落ちた處は水淺き泥の中だ、泥で作つた人のやうなもの

を、岸の草の上に横にしてある、鎮江の驛長さんが世話をやいて、とりあへず引上げてやつた處、我等は元來華中鐵道の招きを受けて此の旅を始めたもの、それで鎮江の驛長さん休み番を幸ひに、揚州の案内をしてくれたわけだが、此の不慮の怪我人も見て居れず、漁村の男女を呼び集めて泥を洗つてやる、蕙を敷かせてやる、近處の者かと問へば、皆々知らぬ男だといふ、落ちた男しばらくは聲も出なかつたが、漸く在所を言つた様子、驛長さん銀貨を與へて、船で送つて行くやう取計つてやつた、知らぬ者が死なうと病まうと、先づ尋常路傍に見て置く習ひの國がら、此の晝寝男の運命もおぼつかなきわけ、他國の人に危いところを救はれると、晝寝の夢にも知らなかつたであらう。

古揚州の春光も此の一件で何やら興さめ、船をかへして歸路に就く、船頭は若い女二人、巧に棹を使ふ、之を昔舟娘といつて、衣裳容色も小ぎれいに、船



も畫舫の彩色などあつて、舟娘或は色をも賣つたか、と思はれるやうな古い詩も見えた、嘉興の南湖で乗つた船は、舟娘化粧をして居て、胴の間に寢室の設あつたが、其類かと思ふ、此地の今の娘達は單なる女のかせぎであらう、水路半分程のところ、向ふから堤の上をお婆さんが手籠を提げて來て、柳の下から聲をかける、こちらでも聲をかけ棹を留めて手籠を受取る、籠の中はお辨當、娘達は同胞で、家なるお袋が晝飯を持つて來たわけ、晝飯時も大分過ぎて居る、お袋は氣がせいたであらう汗になつて居た、母が子を思ふ人情はどここの國でもかはらず、あたり前の話だが、見て居て悪い氣持ちのせぬ光景だ、娘達は代り合つてお辨當にかゝる、春ぬるむ水の中には、水草茂り水草の間に小魚泳ぎ小えびも跳ねる、唐の杜牧は揚州で詩酒風流をはしいまゝ恣にした、たゞ今の風光まことに杜牧詩中にもありげな情緒だ、と見て居ると柳を隔てた丘の上に土煙立ち

一隊の兵隊さんと軍馬とが疾歩して過ぎて行く、別に砲聲も聞えぬ故、前線に事あるわけで無く、常規の交替か小さい移動であらうが、日本の兵の動きに一丝の緩みなければ、見て居る方でもおのづから氣が緊まつて襟を正す、此の春の日は常の春の日ならず、杜牧の詩どころでは無かつた。

山居畢

昭和十七年三月二十日印刷  
昭和十七年三月三十日發行

山居  
定價貳圓

著者 小杉放庵

發行者 東京市麴町區丸ノ内二丁目二番地  
木田開

印刷者 東京市牛込區板町七番地  
堀修造

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社



發行所

東京市麴町區丸ノ内二丁目  
丸ノ内ビルディング五八八區  
會員番號 第一一七五〇七號

中央公論社

振替口座東京三四番  
電話丸ノ内五三五八番

大日本印刷株式會社工場印刷

本朝畫人傳 <small>四卷行</small>	鯨のお詣り	顔を笑ふ	懶畫房草筆	芋錢子文翰全集(上・下)
村松梢風著	小穴隆一著	中川一政著	津田青楓著	小川芋錢著
各 千四・ 二五 三〇	千二・ 一八 四〇	千二・ 一〇 四〇	千三・ 一〇 四〇	各 千二・ 二八 三〇

行發社論公央中

92  
 (E)  
 207

年 5 月 4 日

圓	圓	圓	圓				圓

閱覽濟

終

